

出雲地区

保護司会だより

第24号

開かれた少年鑑別所を目指して

松江少年鑑別所長

吉田 里日よしだ さと



非行・犯罪の防止に関する援助（以下「地域援助」と言います）」の三つに整理されました。

平成二十七年は、当所を含む全国の少年鑑別所にとって、歴史的に大きな節目の年です。昭和二十四年に施行された旧少年院法が全面改正され、旧少年院法下で数か条存在するに過ぎなかった少年鑑別所に関する規定は、全百三十二か条からなる独立した「少年鑑別所法」となり、六月一日に施行されたためです。

特に地域援助については、旧法下で、「少年を収容して鑑別する業務（に）支障を来たさない範囲において」「応ずることができると規定されていた一般の方からの相談依頼等を含め、これまで位置付けがあいまいであった関係機関等の依頼による研修や講演についても、地域の非行・犯罪の防止に資するものであれば、地域援助として本来業務に位置付けられることとなり、旧法下では、どちらかと言えば受身的であった地域に向けての活動について、積極的に「打って出る」ことが可能になったと言えます。

新しい法律においては、收容される少年の人權を適切に保護するため、少年の権利・義務や職員の権限が明示されたほか、不服申立制度の充実、第三者委員会の導入などが盛り込まれました。また、少年鑑別所の業務が「鑑別（対象者の問題の所在を明らかにし、処遇指針を提示すること）」、「観護処遇（在所者の処遇全般を指す）」、及び「地域における

こうした変化については、新聞やテレビ等のマスコミにも取り上げられ、それが新たな相談や講演等の依頼につながり、講演等を聴いた方などから更に依頼をいただく、というような形で、少しずつ地域援助活動が広がりがつつあります。

少年鑑別所法では鑑別や観護処遇についてもその理念や方法が整理され、対外的に説明がしやすくなりました。これまで、何をしているか余り知られていなかったがゆえに敷居の高いイメージが強かったとすれば、これら従来の業務についても積極的に周知を図ることで、少しでも敷居を下げていきたいと考えています。そうして、地域住民の方々や関係機関との交流が増えれば、よりの確に地域の実情やニーズを把握することが可能になり、より効果的な地域援助活動を行うことができるようになります。活動で得た経験は、当所の知識の蓄積や技術の向上につながり、より良い援助を可能にします。少年鑑別所は、こうした好循環を起こすべく、地域に開かれた機関を目指していきたいと考えていますので、今後ともどうぞよろしくお願ひします。



人はみな、
生かされて
生きてゆく。
更生保護ネットワーク60周年

平成27年度 「社会を明るくする運動」 標語及び作文入選作品の紹介

出雲地区保護司会では「犯罪のない明るい街づくり」「青少年の非行防止」をアピールする標語を、一般の部、小・中学生の部（出雲市青少年育成市民会議との共催）として募集しました。一般は130点、小学生は496点、中学生は464点の応募がありました。

また、島根県社会を明るくする運動推進委員会が行った作文コンテストに協力し、小・中学校に参加を呼びかけたところ、小学生から55点、中学生から39点の応募がありました。

当保護司会で慎重に審査した結果、次のとおり決定しました。たくさんの応募をありがとうございました。

一般の部

最優秀賞

知らぬふり、
見逃す心が 罪づくり
大津町 児玉 節子

優秀賞

気づこうよ
言っていること 悪いこと
万田町 清水 芳子

まず一步

急がずあせらず 共にゆく
本庄町 多久和史樹

日に一度

しゃがんで聴こう
子の言い分
下古志町 神田 敬子

さりげなく

子ども目線で 話そうよ
武志町 出川 武範

地域の子

我が子と同じ 愛の声
大社町 佐々井康光

佳作

再犯を
防ぐ力は あたたかさ
稗原町 高尾恵美子

打ち明けて

涙が笑顔に 変わるから
湖陵町 春日ノブ子

声掛けは

明るい未来の 道しるべ
多久町 新宮紀代江

なやみごと、

迷わず家族に 打ち明けて
平田町 磯崎 又司

良い・悪い、

勇気を持って 言える子に
大社町 林 宏

やり直す

君を待ってる 地域の輪
大津町 石橋 律子

これ位

その一言が 別れ道
塩冶町 渡部 悦子

思いやる

気持が大事 地域の輪
大社町 竹内 玄光

立ち直る

君に差し出す 支援の手
芦渡町 石橋 厚

あいさつで

地域に広がる 笑顔の輪
斐川町 門脇さとみ

小学生の部

最優秀賞

思いやり

みんなの心の まん中に

西野小学校 三年 足立 龍斗

優秀賞

あいさつは

心をつなぐ タスキだね

今市小学校 二年 近藤 颯太

にっこりと

えがおであいさつ

うれしいな

大津小学校 一年 石橋 花望

佳作

友だちは かぞくとおんなじ

わたしのたから

今市小学校 二年 岩野 宏虹

ともだちに たくさんいおう

ありがとう

大津小学校 一年 佐藤 真斗

広げよう

みんな友達 なかまの輪

高松小学校 四年 日下 輝大

なにげない

やさしい言葉が 思いやり

長浜小学校 四年 川上 結女

いやなこと

いわれていやなら

いっちゃだめ

北陽小学校 四年 湯原 健太

友だちの

心のさけび 気づこうよ

北陽小学校 四年 高尾 泰生

やめようよ

仲間はずれと しらんぷり

灘分小学校 四年 梅木 真心

育てよう

差別を見ぬく 心の目

東小学校 六年 長崎 天音

思いやる

心ひとつで いじめなし

東小学校 六年 田中 太陽

ポイ捨ては

自然も 心も 傷つくよ

莊原小学校 六年 勝部 結希

中学生の部

最優秀賞

「ありがとう」

言われて気付く

あたたかさ

浜山中学校 二年 荒木 愛尋

優秀賞

振り返ろう

自分の行動 相手の気持ち

浜山中学校 三年 高橋 里菜

LINEより

直接かわそう 心の声

斐川西中学校 一年 伊原 弦希

佳作

そのクスリ

体も未来も こわすもの

第一中学校 一年 山根 知晃

やめようよ まずはみんなの

知らぬふり

第一中学校 一年 持田陽菜子

ちょっと待て

君の行動 それでいい?

第一中学校 一年 吉田 太一

僕の町

「えがお」のタスキを

つなげよう

浜山中学校 三年 高木 俊

認め合おう

みんなそれぞれ 違うんだ

斐川東中学校 二年 青木 希

出会ったら

明るいあいさつ 自分から

斐川西中学校 一年 佐名木拓海

いじめはね

見て見ぬふりで

終わらない

斐川西中学校 一年 曾田 愛果

届けよう

明るい笑顔 地域の人へ

斐川西中学校 一年 仲間 夏月

あいさつで

広がる笑顔と 地域の輪

斐川西中学校 二年 勝部 麻衣

ちょっとした

軽い気持ちが 犯罪に

斐川西中学校 二年 原 快成

「社会を
明るく
する運動」

作文コンテスト優秀作品

島根県更生保護女性連盟会長賞

平和な世の中にするために

出雲市立塩冶小学校 五年 勝部愛和



私は、ニュースで大阪の中学一年生の男女が殺害されたときいて、びっくりしました。理由は、中学生でも不審者につれていかれそうになった時にげれなかったからです。いくら学校で教えてもらっていても、しっかり自分のことのようにしんげんに取り組まないと、実際にそうなった時に、習ったことができないからしつかりしないといけないと改めて思いました。

学校で習ったことをもう一度ふり返ってみました。「いかのおすし」「いか」「行かない」「の」…乗らない、「お」…大声でさけぶ、「す」…すくにげる、「し」…知らせる、これをいつも

頭にいれておこうと思います。

でも、これは、不審者に会ってしまった時であり、まずは会わないことが大事です。そのために、学校で決められたルールを守って、おそくかえったり、一人でいたり、人通りが少ないところなどに、行ったりしないよう気をつけたいです。とくに冬は、日がみじかいので、すぐに暗くなってしまいます。かい中電灯や、蛍光タスキなどをひとつと少しは安心できます。

でも、今の時代は、人の命をかたんにうばう事件が、身近に発生していることとびつくりします。

子ども、親、犯人、三つの立場、けいたい安全システムに

ついて、どうやったらこういう事件を防いで、子どもを守れるか考えてみました。

まず、子どもの立場です。子どもは、何があってもちゃんと親に話して、コミュニケーションをとることが必要です。言いくくてもちゃんと話さないと、自ら命をおとすということも考えてしまいます。家族だから話せることをしっかりと話してみましよう。

親の立場です。親は、しっかりと子どもをみてあげることが大切です。子どもにきょうみをもち、たくさん話しかけてあげる。今回の事件も、夜に親が仕事をしていた、子どものことをちゃんとみていなかったように思います。家計のために夜、働かないといけないことも分かるけど、それで子どもをうしなすって意味がありません。子どもと話せる時間を大切にしたい方がいいと思います。

犯人の立場です。犯人の気持ちには分かりませんが、何かしらなやみをかかえているかもしれません。殺害などは、ぜった

いにしてはいけないことだけど、何かそういう行動をさせることがあるならば、それを相談できるしせつがあればいいなと思います。

次は、けいたい安全システムについてです。小学生からけいたいを持つ人も多くなった今の時代、けいたい原因になる事件が多いです。けいたいをもっとよく使うために、GPS機能を未成年に全てつけるぎむにしたらいと思いました。

そして、まわりの人は、夜おそくに未成年が歩いていたら、声をかけたりして、社会みんなが子どもを守っていくようになればいいです。

平和な世の中にするため、みんな協力してがんばりましよう。

●その他の人賞者

山陰中央新報社賞

まあちゃんの笑顔

出雲市立塩冶小学校 五年

山田壮馬

山陰中央新報社賞

あたりまえの力

出雲市立斐川西中学校 一年 村崎 恵実



私は、小学校の時に、校長先生が言われた言葉を覚えています。「当たり前前」のことをやろう。」単純な言葉でしたが、その時、私の頭の中は「当たり前前って？」と疑問で一杯になりました。そして、その言葉の意味は、中学生になるまで分かりませんでした。

中学校へ入学し、最初は靴をそろえて下駄箱に入れていましたが、次第に何気なく靴を下駄箱に入れ、入れながら友達に挨拶して会話をして…と適当に靴を入れるようになっていきました。下校時、靴が色んな方向に向いていることもありましたが、取りにくいなと思いつつも、履いて帰っていました。

そんなある日のことです。中学校生活にも慣れ、登校する時間だんだんと遅くなっていききました。そこには「まあちよつとくらいいいか。」とけじめがなくなってしまうている自分がいきました。その結果、慌てて家を

出ることになった私は、靴のかかとを踏んだまま自転車に乗りました。友達が「おはようー」と元気な声であいさつしてくれたいにも関わらず、急いでいた私はその友達のあいさつも無視してしまいました。「仕方ない、急いでいるし。挨拶くらいで別にどうにもならないだろう。」と思ってしまうのです。その時、私の中で何か引つかかるものはありませんが、とにかく余裕がなく、たった「おはよう」の四文字が言えなかったのです。

それをきっかけに、その友達と話さなくなりしました。なんとなく溝ができ、話しかけないし、話しかけても、もらえなくなりしました。「どうしてだろう…」。これまでだったらしゃべっていたのに。「あの時、ちゃんと挨拶していれば。」私の心は後悔の気持ちで一杯になりました。毎日が暗い気持ちのまま過ごす日々でした。そして、そんな時に気付いたので

す。下駄箱の私の靴のかかとは、ぐしゃっとつぶれていることに。それはまるで自分の今の気持ちのようでした。とてもさみしい、悲しい気持ちになりました。

暗い気持ちのまま帰宅すると、その日は家族の帰りが遅く、一人の日でした。普段当たり前前にある晩ご飯、畳まれた洗濯物がありませんでした。自分で晩ご飯を作ろうとしましたが、意外に難しく、時間がかかりました。片付けまで済むと、洗濯物を畳む気力も残っていませんでした。普段当たり前前と感じていることが、自分ですることなんにも時間と力があるとは思いませんでした。

「当たり前前って、当り前じゃないんだ。」

そう思った時、校長先生の言葉が思い浮かびました。当たり前前にしてもらっていたことも、相手は心や時間をかけてくれていたことに。自分が当たり前前であることをもっとやれば、相手を助けることにつながるかもしれないということ。

もっと早く気付いていればよかった。あの日だって、以前出ていた当たり前前のことをきちんとしていれば、友達に挨拶をす

る余裕もあった。家でも母の手伝いをしていれば、母は少し楽になったのかもしれない。そう気付いた時、私の中で自然にスィッチが入り、けじめをつけて「当たり前前」のことをしようという気持ちになりました。

翌日、私は以前のように余裕をもって学校へ行き、気まずくなつた友達に話しかけてみました。たつたそれだけでしたが、わだかまりが消え、前のように会話も弾み、私は嬉しくなりました。

「当たり前前」には、自分の力を百パーセント出させてくれる力があるのだと思います。また、今の自分の姿を振り返らせてくれます。あの時ぐしゃっと潰れていたかかと。あの日から、私はくつをきちんとそろえるようになっています。くつの状態が今の私の心の状態なのです。人の気持ちに気付けるのも、自分らしく生活を送ることができるようにも、「当たり前前」の力がとても大きいです。忘れがちになった時こそ、「当たり前前」が出来ているのか、振り返り、自分らしく充実した日々を送りたいと思います。

「恕」の心で社会を明るく

保護司

高尾

彬 (犯罪予防部会)

平成二十七年七月一日、出雲市役所一階のくにびき大ホールにおいて第六十五回「社会を明るくする運動」のメッセージの伝達式と啓発講演会が開催されました。

講演会では、講師である五代目一龍齋貞花師匠を講師としてお迎えして講話と講談を聞きました。

師匠は、昭和四十三年にサラリーマンから転身して講師の道を歩ま



講演中の一龍齋貞花師匠

れ昭和五十一年に五代目一龍齋貞花を襲名しております。講師としての仕事をしながら東京都千代田区の保護司、東京保護観察協会理事としてもご活躍中です。昭和五十四年から一日保護観察所長を務める傍ら全国各地で講演活動を行っております。

また、昨年九月には、芸能界の方で師匠と同じように保護司として活躍されている方々に呼びかけをされ「芸能保護司会」を設立されました。この活動を通して、人間味に富んだすばらしい更生保護の心を、それぞれの立場や方法で社会に発信し、届けていきたいと願っております。

このような活動は更生に向けて努力しておられる方々だけでなく保護司にとりましても心強い支援となっております。

講演会は「ぬくもりのある地域と家庭」という演題で始まり、前半で講話、後半は「更生保護の父 金原明善物語」の講談でした。

講話の中では、いろいろな言葉や事例が紹介されましたが、その中

特に印象に残った言葉は次の二つです。

一つは「恕」という言葉です。この言葉の意味合いは思いやり、やさしさだそうです。

更生保護にはなくてはならない心であると思いました。

もう一つの言葉は「甦る」という言葉です。この漢字は更生の更という文字と、生という文字を組み合わせてできているという話をされました。私自身今まで考えたこともない発想でしたが、黒板に書かれるとまさにその通りだということを実感し納得した次第です。

次の講談では金原明善の一代記や彼が取り組んだ更生事業について興味深い話題が紹介されました。

その概要は次の通りです。

金原明善は天保三年（一八三二年）に天竜川のほとり安間村（今の静岡県浜松市安間）の名主の家で生まれています。

明治維新後、成人になった明善は土地や家財を寄付し（当時のお金で六万円余り。現在のお金に換算すると二十五億四千万円相当）天竜川の治水事業に身を投じます。その話が明治天皇まで伝わり、明治十年には明治天皇から夫婦そろって表彰を受

けます。その頃から「遠州の義人・金原明善」の名が広く世に知られるようになっていきます。

治水事業が国の直轄事業となり、寄付の残りが返金されましたが、その資金を世のため人のために使う公益事業に取り組みます。明治十九年から九十歳六ヶ月でこの世を去るまでの約四十年間、金融・運輸・製材・北海道の開拓・植林事業・疎水事業など多彩な活動を行います。そのような中で特筆すべきことは今回の講話「更生保護の父 金原明善物語」として紹介されるもとなった更生事業です。その事業とは、監獄（現在の刑務所）から出所した人たちを温かく迎え入れ、地域の中で希望を持って生活していくための更生保護施設を建設するための資金集めに奔走し、実際に施設を建設し運営していったことです。明善は時には、施設を利用している人と寝食を共にして人の道を説いています。このような話は時代は異なっても感銘する話であります。

講話と講談を聞き、地域に住む一人ひとりが「恕」の心をもって更生に向けて頑張っている人への支援助と協力をいろいろな形でしていくことが大切だと思いました。

出雲地区保護司会視察研修に

参加して

保護司 三 成 歳 子 (研修部会)

平成二十六年度の社会を明るくする運動の啓発講演会で講演された寮美千子先生の編集出版された『空が青いから 白をえらんだのです』の詩集を読みました。この詩集を読んで、涙があふれました。是非、この詩を書いた少年達の居る奈良少年刑務所を視察したいと思うようになりました。そんな時、視察研修が計画され、喜んで参加させていただきました。

奈良少年刑務所は、奈良の町の中の民家の立ち並ぶところにあり、明治時代に建てられた、レンガ造りのヨーロッパを彷彿させる素敵な建物で、この中に刑務所があるなんて想像できませんでした。玄関に入って、注意事項を聴き、二列に並んで、静かに建物の中に入りました。そして、刑務官のお話を聴きました。ここでは、受刑者に対して、犯罪の責任を

自覚させ、立ち直り意欲を喚起し、

社会生活に適応する力を身につけさせるため、「作業」の他に「改善指導」や「教科指導」という教育的な矯正指導を行っております。また、

受刑者が、刑を受ける意義を理解し受刑中の処遇に自ら進んで取り組めるようにするため、入所時には「刑執行開始時の指導」を行い、出所前には、円滑に社会復帰できるように「釈放前の指導」を行い、二度と犯罪を繰り返さないようにこのような矯正指導に力を入れておられることがよくわかりました。

この矯正指導の一つに、寮先生が担当しておられる「社会性涵養プログラム」と名づけられたプロジェクトがあります。寮先生は、「童話と詩」の授業で、言葉を中心とした情操教育に力を入れられ、詩を書かせられました。そして、その詩を本人

が朗読して、みんなが感想を述べ合うそうです。すると、たった六か月、十八回の授業で目の前の彼らが、魔法がかかったように変わっていったそうです。この結果は、寮先生の力も多大ですが、この刑務所の職員の方々の力も多大なものだったことでしょう。

刑務官のお話の中に、矯正指導は、

施設内の規律秩序を維持しつつ受刑者の生活全般を指導する刑務官と、心理学、教育学、社会学などの知識を活用して指導する教育専門官や調査専門官が協力して実施して、受刑者の再犯防止に取り組んでいるとありました。

次に、一人ひとりの部屋を見学させていただいたところ、きれいに整頓してありとても感心しました。また、家族の写真や幼い子供さんの写真が飾ってあって、胸の奥がキュンとしました。作業をしている受刑者の方々は、

黙々と一生懸命に作業をしておられました。

この研修視察を終えて、人は変われるということを痛切に感じました。私たち保護司は、更生しようと努力している人たちに寄り添い、共に暮らせるように地域の皆さんと協力しながら、支援していきたいものです。



奈良少年刑務所 (入口にて)

白藤に託した母の想い

保護司 横木俊信 (協力組織部会)

松江にある更生保護施設の名称「しらふじ」の由来は次のようなものであると、理事長さんが施設便りに載せておられます。

この施設に入っている息子に会いに行けない状況にあった母親が、山間地の自宅を訪問した施設の職員に、白南天と共に白藤をことうけたそうです。その二本の純白の花のようになんか生きてほしいという願いが込められていたにちがいないと思います。今でも元気に施設の前庭で育っているとのこと。

さて、去る九月十八日、その「しらふじ」を、岡事務局長、糸賀保護司と訪問し、第二回研修会の際に保護司の皆さんから賜ったご芳志(タオル、衣類、肌着、リュックサック、



矢野施設長としらふじの玄関にて

洗剤等)を届けて参りました。

この建物は、かつて私が勤務していた丘の上の学校の真下に位置していますので、大変なつかしく感じました。しかし、施設は二年前に新築され、すばらしいものに生まれ変わっていったため、以前の面影はまったくありませんでした。

物資をお渡しした後、補導員さんに内部を詳しく案内していただきました。居室はすべて個室で、一階は高齢者や障がい者向けにするなど細かな配慮がなされていました。全国の保護施設の中でも大変人気のあるものだと思います。

定員は二十名ですが現在は多少空室があるとのことでした。入所者の多くは出雲地区協力事業主会会員のお世話で、毎日仕事に出かけています。まだ仕事が見つからない人は敷地内の菜園で野菜を栽培したり、樹木の剪定などを行っています。たまたま出会った入所者の方は気持ちのよい挨拶をしてくれました。

施設職員の皆様には我々の届けた物資を活用していただき、入所者のできるだけ早い社会復帰のために変わらぬご努力をお願いしたいと思います。

更生保護功労受表彰者

(平成二十七年)

法務大臣表彰

米田 宣雄

全国保護司連盟会長表彰

坂本 光弘

島根県知事感謝状

小倉 郁子

中国地方更生保護委員会

委員長表彰

三成 歳子 園山久美子

藤森 麗子

中国地方保護司連盟会長表彰

富岡 俊夫 石橋 敏昭

景山 大圓 安田 公臣

松江保護観察所長表彰

高尾 彬 石飛 準

佐藤 道子 田部 敏雄

島根県保護司会連合会

会長表彰

石川 潤子 濱村 芳文

保護司の異動

◎退任

柳樂 泰洋(出雲)

常松 秀紀(平田)

福岡 百樹(斐川)

富岡 俊夫(斐川)

(平成二十七年十一月三十日付)

◎新任

藤原恵美子(出雲)

堀内 時雄(平田)

勝部 篤(斐川)

水 教一(河南)

(平成二十七年十二月一日付)

編集後記

巻頭には、松江少年鑑別所 吉田里日所長に執筆をお願いしました。

本年、全面改正された「少年鑑別所法」を業務の基盤に据え、「地域に開かれた少年鑑別所」を目指していることが理解でき、鑑別所の敷居が低くなった感じがします。

「社会を明るくする運動」島根県推進委員会が主催した作文コンクールは、出雲市から多数の応募がありました。

いずれも生活に根ざした自分の「思い」を深め、広げ、つなげる力として訴えています。

その中で、優秀作品として、三点が入賞しました。おめでとうございます。心から祝福いたします。

(藤田 努)